

ジャグパル

JugPal

2004年7月4日 第24号



インタビュー

【 KAZUHO さん 】

今回はジャグラーのKAZUHOさんです。

KAZUHOさん(24才)の演技を初めて観たのは去年の野毛大道芸フェスティバルでした。(正確には少々違うのですが、それについては後述)
その時の第一印象は、とにかく「かっこいい！」でした。

しっかりとした技術を携え、自信に満ちて、ベテランの風格さえを漂わせた、久々の本格派ジャグラー発見といった思いで、彼の一举一動に釘付けになりました。

さらに司会者が、彼がベンポスタ(註)にいたことを紹介したので、私にとってはこれまた驚き。なるほど、その時の経験がこんなにも若いのに、卓越した技術とプロとしての風格を醸し出しているのだなと勝手に合点しました。

さてベンポスタですが、帰宅して早速蔵書等をあさってみると、ベンポスタに関しては書籍3冊とビデオ1本が見つかりました。

1. 『夢、サーカス - ベンポスタ子ども共和国から -』
松美里枝子(文)小林和子(画)/学習研究社/1994年初版
2. 『サーカスの詩 - ベンポスタの子どもたち -』
本橋成一(写真)/影書房/1993年初版
3. 『世界 第584号』
ヘスス・シルバ神父 vs 堂本暁子(対談)/岩波書店/1993年7月号
4. 『オラ・アミーゴス』1993年日本公演ビデオ

そうなんです、冒頭にKAZUHOさんを観たのは去年と書きましたが、既にビデオで彼(当時13才)の演技にはお目にかかっていたのでした。書籍に幼い頃の彼の写真を見つけたりと、この書籍とビデオはファンにとってはお宝ものです。

さてインタビューの開始ですが、もちろんまずはベンポスタに入りたいきさつからお伺いしました。彼は10才の時にベンポスタに入りましたが、どういうきっかけで？その訳は先に紹介した本に書かれてありました。



夢、サーカス



サーカスの詩

『夢、サーカス ベンポスタ子ども共和国から -』より

一帆(十三歳):

親の力にたよらないで、強くなりたいと思った!

一帆は小学四年生のとき、学校があまりおもしろくありませんでした。

どこがおもしろくなかったか、というと、

「まず宿題。毎日、いっぱいあってさ。」

(略)

でも、学校がつまらないことが、ベンポスタにきた、そう大きい理由でもないのです。

イギリスの「サマーヒル」というフリースクールのお話をきいて、一帆は、

「おもしろくて、親からはなれて暮らしてみたくて。」

相談したら、親も「一帆のやりたいことをやればいい」と賛成してくれたのです。

(略)

それに、一帆は、「いつも、だれかの手を借りないとちゃんとできなかったのに、こっちにきてから強くなったと思う」と、きっぱりいいました。

「ずいぶん生意気なこと言っていたんだなあ」と照れくさそうに私が持ってきた本を手にしつつ微笑んでいました。

「僕はサーカスの空中ブランコをやりたいです。」という言葉に、

「へえ〜っ! そりゃ珍しいね、じゃあサーカスはよく行ってんだ。」

「……そう言えばサーカスは見たことなかったなあ。」

「(ずっこけて)見たこともないサーカスの、しかも空中ブランコをやりたいの?」

「うん、とにかくサーカスをやりたいです。」

なんたる天真爛漫というか無謀というか、この会話で二人は大笑いし、すっかり私は彼が気に入ってしまいました。

サッカー選手とか野球選手とかにはなりたくなかったのと聞くと、野球はやっていたのだけれど、アレ、坊主にしなきゃならないのでイヤだったんですよ、という回答にも大笑い。

とにかく(見たこともない)サーカスをやりたいと、10才の時に決心した彼の度胸には驚きですが、それにも増して凄いと感じたのは保護者である親の決断と実行力です。

想像してみてください、幼い我が子が、今までの暮らしの中で何ら接点のない、素性も良く分からない「なんと共和国」に入って、見たこともないサーカスという世界に息子が飛び込むなんて。

この時点で、未成年2人の親でもある私は、KAZUHOさんだけではなくこのユニークなお母様にもインタビューに同席してもらおうべきだったと反省したのでした。

ともかくこの親子、決断力&実行力はある! ベンポスタに連絡しようとしたら、なんと主宰者であるシルバ神父が来日していることを聞きつけ、神父に直接お願いして即入国が決定。若干10才でベンポスタのあるスペインに単身旅立ったのでした。

さてベンポスタでの毎日のスケジュールは概ね以下のようです。

7次30分頃起床、教会で礼拝、掃除、朝食、学校、労働(農作業、食事作り、建物補修等)、そして15時頃に昼食。17時頃からサーカスの練習を始め21時頃に夕食をとります。

思ったよりハードな生活ではないので意外でした。

ビデオで観たサーカスのレベルの高さから考えると、もっと長くそしてハードな練習が日々行われているのかと思いきや、そうでもなくサーカスは生活での絶対的な中心ではないようです。

ベンポスタには当時120~130人ほど住んでいて、一割ほどが成人で、サーカスを教えてくれるのはそのうちの数人だったそうで、施設としては体育館のほかにサーカステントも常設されていたとのこと。

KAZUHOさんはそこでジャグリングを初めて見て「かっけえ〜!!」と衝撃を受け、是非チャレンジしたいと、種目としてジャグリングを選びました。

ここは共同生活の場ですから、全てを自分たちでこなしていかななくてはなりません。
10ヶ国ほどから子どもたちが集まっていますが、年3回ほどはサーカス公演で世界中を回ります。
KAZUHOさんはコロンビア、ベネズエラ、イタリアそして1993年に日本に来ました。

日本公演中に14才の誕生日を迎えて帰国し、その時の日本公演の様子が先に紹介したビデオに収められていますが、ベンポスタのサーカスは技術的にも演出的にも十分観るに値する立派なエンターテイメントに仕上がっています。ビデオでは当時のKAZUHOさんのクラブジャグリングも楽しむことができます。

日本公演の時には11人の日本の子どもがベンポスタにいて、帰国した仲間とは今でも時々会うようですが、サーカスをやめてからKAZUHOさんのようなアーティストになった方はいないそうです。これは本当に意外でした。

KAZUHOさんはその後さらに深くジャグリングを独学し、ジャグラーとして活躍しておられますが、この道に進んで良かったと満面の笑みで話してくれました。

サーカス団で大活躍し、優れた技術も持っているのだから、日本での活動はさぞかし順調だと思いきや、一人(ピン)は大変です、と仰いました。

そして、サーカス団にいた頃と比べると、一人での苦勞は比ではないが、ただプロ意識を強く感じ、その大変さの中で最近ようやく自分の芸のあり方が明確に見えてきたような気がします、とも仰っていました。

そんな中で目標としているのは、「(世間的にジャグリングは単なる一つのツールとしての見せ方が多い中で)ジャグラーとしてジャグリングというコンテンツを創るということ。」であり、この言葉は幾度となく力強くインタビューで聞くことができました。

そのために彼はジャグリングの可能性を最大限に探るべく、現在はマジシャンのYOHEYさんとジャグリングとマジックの新しいコラボレーションを創り上げつつ、実験的な興味ある公演を披露しています。YOHEYさんとは同世代ということもあり非常に良きパートナーとして気が合うようで、今後の彼らの展開が気になるところです。

彼からの電話を受けると「ジャグラーのカズホです。」と名乗られるのが非常に印象的です。

ジャグラーであることにこだわり、そして誇りを持っている、とても素敵な青年でした。

でもその反面、「僕、さんや、ちゃんのように集中力が持続しないんですね。彼らの練習は本当に凄くて、とてもとてもついていけませんよ、僕結構ムラがあるんですよ。」と、変な気負いもなくごくごく自然にジャグリングを楽しんでいる様子も感じられました。

インタビューの最初は緊張気味でしたが、次第にリラックスし冗談も飛び交い、あっという間の本当に楽しい13時間強のインタビューが終わりました。KAZUHOさん、今後も注目していますよ。

KAZUHO & YOHEYの連絡先:

E-mail : info@studioloop.com

Webサイト : <http://www.studioloop.com/>

(註)ベンポスタ子ども共和国:

同共和国は1956年、シルバ神父が戦災孤児とともに創設。スペイン北西部のオレンセ市郊外にあり、世界各国の子どもたちが共同生活している。

「強い者は下に、弱い者は上に、子どもはてっぺんに」との理念を掲げ、子どもによる自治を実現し、学校や農場、教会などがあり、独自の通貨も持つ。

子どもたちによるサーカス公演が共和国最大の収入源。

[安部 保範 <chansuke@chansuke.net>]



書籍紹介

【The Encyclopaedia of Ball Juggling】

書名 The Encyclopaedia of Ball Juggling (Third Edition)
著者 Charlie Dancey
出版 Butterfingers (<http://www.butterfingers.co.uk/>)
ISBN 1-898591-13-X
価格 14.95英ポンド



ジャグリング界に大きな影響を与えた名著の1冊が、1994年の初版から10年弱の時を経て、大幅な加筆修正とともに第3版に改版されました。この本の特徴については、ジャグパル2号の書評で述べましたので省きますが、どこがどのように変わったのかをご紹介します。

10年といえば一区切りです。10年前と言えば「ジャグリング」という言葉さえ一般の日本人には認知されておらず、日本のジャグラー人口も数えられるほどでした。インターネットの利用者もごく限られており、DVDなどというものもありませんでした。振り返れば、この10年の進歩には驚かされます。ジャグリングの技術や理論についても同様です。

初版193ページから213ページへと約1割増えたページ数、追加された28項目は、この10年間におけるジャグリング界の進歩を取り込み、抽出したエッセンスと言えるかもしれません(整理/削除された項目、大幅に修正された項目もあります)。増えた内容を大まかに分類すると、だいたい以下のようになります。

- ・ 新しいジャグリングの表記法や概念
 - ・ 因果関係図(Causal Diagram)
 - ・ ミルズメス状態遷移図(Mills Mess State Transition Diagram : MMSTD)
 - ・ サイトスワップ状態表 (Siteswap State Tables)
 - ・ サイトスワップ用語の補足
- ・ Gandini Juggling Project の発明による2人組でのパターン(Cranes, Grover, Middlesborough, Turbines など)
- ・ その他の新技(Dropswap, Eric's Extension, Fake Mess, Follow, Mike's Mess, Romeo's Revenge, Squeeze など)

このうち、ミルズメス状態遷移図については第2版およびそれに基づく日本語版(邦題:ボールジャグリング百科 井上恵介 訳 遊戯社 刊)で付録として説明されていますし、因果関係図については姉妹編の Charlie Dancey's Compendium of Club Juggling で説明されているものとほぼ同じです。

個人的に一番感心したのは、本書で初めて目にした「サイトスワップ状態表」です。ここで説明するのは難しいですが、縦横に直行する表の列と行を辿っていくと、ありとあらゆる任意の長さで組み合わせのサイトスワップを見つけ出すことができる図と言えましょう。

たとえば、531 から 51 へは直接つなげることができず、**4** と **2** をはさんで、531..531 **4** 51...51 **2** 531...531 としてやる必要があることが、図を手でたどることによって理解できます。

さらに面白いのは、パターンの途中でボールの数を増やしたり減らしたりすることも同じ図を使って考えることができる点です。コンピュータ・ソフトウェアで同じようなことをさせることもできますが、理屈が図として目に見えるのはとても分かりやすく、新鮮な驚きを感じました。

全書に渡って、サイトスワップ、はしご図表記(Ladder Notation)、因果関係図(Causal Diagram)による説明が追加されており、これらが理解できる人にとってはさらに分かりやすくなった一方、初めてこれらの表記を目にする人にとっては「判じ物」度が増したかも知れません。

もう一つ特筆すべきことは、初版、第2版で誤っていた Burke's Barrage の説明が第3版において、ついに訂正されたことです。

初版出版時から「Ken Burke のオリジナルと原理は同じだが違うものだ」という指摘がされていたのですが、本書および本書を参考にした教本やジャグリング・シミュレーターの影響は大きく、今ではパターンの外側を大きく回す「亜流 Burke's Barrage」の方が一般的になってしまいました。

第3版では、「3ボール技の解説書 Beyond the Cascade で説明されている Burke's Barrage とほぼ同じ「正調」のやり方に書き改められ、これまでの誤ったやり方は Charlie's Cheat という皮肉っぽい名前の別技として掲載されています。

決定的な間違いではなかったとはいえ、「事典」として権威を持ってしまった以上、このような間違いを直していくことは必要なのでしょう。

最新の情報を追加し、これまでの誤りの訂正や解説の追加を行った第3版は、一皮むけて、まさに「ボールジャグリングの百科事典」という名に恥じない本になったと言ってよいと思います。

それを著者も意識しているのか、表紙は以前より重々しい感じの緑色になり、書名も控えめな感じがする Charlie Dancey's Encyclopaedia of Ball Juggling から「決定版」という重みを感じさせる The Encyclopaedia ... に変わりました(書名は変わってもISBN は変わっていませんので、注文の際は third edition であることを店に確認してください。第3版の発売後、半年が経過しましたが、古い版が在庫に残っている可能性があります)。

とはいえ、楽しいイラストやひねりの効いた英国式ユーモアは健在ですので、ご安心を。

さて、すでに本書の初版、第2版、日本語版を持っている人にとって気になるのは、「わざわざ第3版を買いなおす必要があるのか？」ということだと思います。以下は私の個人的意見ですので、参考にしてください。

目新しい技だけを知りたい人は買いなおさなくてよいでしょう。Gandini の技は彼ら自身の解説ビデオが出ていますし、他の技も多くはインターネットなどで捜せるとと思います。

英語が苦手な人は、第2版を訳した日本語版を読んだ方が楽で、結果的に得るものが多いと思います。

サイトスワップやジャグリングの表記法、理論について興味がある人、現代のジャグリングの概要をまとめたものを読みたい人にとっては、きっと買いなおす価値があるはずです。歴史的な収集物として買っておくのも意味があります。

さあ、これからの10年で、ジャグリングの世界はどのように進歩し、変わっていくのでしょうか？

また10年後に本書が改訂され、より充実した内容になっていくことを期待します。

[西川 正樹 <nishi-m@tkf.att.ne.jp>]



by いいづかちささん



MIMOのラスベガス公演日記

【MIMOのラスベガス公演日記】

～私、ラスベガスの大舞台上で傘を廻しちゃいました～

自他共に認める素人大道芸人のMIMOが2004年4月の17日と19日、ラスベガスで傘廻しをやってきました。その内容を簡単に記しますと、

- ・ラスベガス大ステージでの傘廻し
- ・会場は巨大ホテルBallysのプラチナボール
- ・1000人近くの大観衆
- ・左右2枚のスクリーンでMIMO大映し
- ・観客の約8割は外人のため全編英語での口上
- ・ほぼ全員「おめでとうございます」の大合唱
- ・本場芸人のマジックよりも大受け
- ・見ていた財界の大物も大喜び
- ・最後はスタンディングオーベーション



こう書くと凄いですよね～。当日撮ってもらったビデオを見ても嘘じゃないことは確認できます。でも、嘘じゃあないのですが…

まあ、ぶっちゃけていうと、
「社内パーティーで社員が余興をやった。その会場がたまたまラスベガスだった。」
それだけのことなんです。ご免なさいlm(_)_m

(毎年4月にNABという世界最大規模の放送機器展示会がラスベガスで開催されます。うちの会社も毎回そこで結構大規模なブースを構えます。そのために集まった会社関係者の前夜祭としての宴会で傘を廻したのです。さらに今回のNABに出展した物も廻したのでよけいに受けたみたいです。)

決定まで…

4月2日、全てはあるひとりの送別会からはじまりました。
その方は放送機器業界では社外にも名の通った人で、最後は子会社の社長まで勤めあげた人でした。その席を盛り上げるためにMIMOは傘廻しを披露したのです。

傘廻しを初めて十数年。職場の宴会で傘を廻すことは時々ありましたが、今回は特別です。退任されるのがかなり偉い人だったので、その会場には現在も偉い人がたくさんお見えになっていました。そうMIMOの直属の上司から、ずーっと偉い人までみんないたんですね。

しかも、その日の傘廻しはとっても受けが良かったのです。これを見ていた偉い人達は考えました。まもなく始まるNAB。その社内前夜祭でこの傘廻しを披露して、営業の志気を盛り上げるのはどうかと。で、その場で決定。いきなりNAB公演です。
酒の席で決まったラスベガス行き。あれは本当の話だったのかと疑っていた月曜の朝、上司に呼ばれました。予定していた人間が一人行けなくなったので代わりにNABへ行くようにとの出張命令です。

当然その人が予定していた業務(新商品の説明&マーケティング)があって、それを引き継いだ形ではありません。
しかし急に言われてもそんなのよくわかりません。
いかにも傘廻し出張のためにとってつけたようなお仕事です。(代わりがいなければ別枠を作ることまで検討していたそうです。)

状況説明を受けて出張に行けるか否かの意思確認が行われましたが、MIMOにとっては一生に一度あるかないかの大舞台です。もちろん「はい。」と答えました。
こうしてラスベガス出張&傘廻しが正式に決定したのです。

事前準備・・・

話を聞くと観客は約900人、そしてその8割は外国人とのこと。
そのため台詞も英語化する必要があります。そこで塾で先生をしているFさんに英語の台本を作って貰いました。

MIMOはそれを一生懸命覚えて、ステージに立ったわけですが思っきりカタカナ英語。口上師を勤めてくれたSさんのネイティブイングリッシュ(彼は純粋日本人ですがアメリカ育ちのため、日本語より英語が得意)と比較するとその差は歴然です。

いっぽう社内でも準備が進んできました。
と言うのも、いくら社内パーティーでの余興と言ってもNABには全世界のグループ会社から1,000人近い人が集まります。また社長も来ることが予想されていました。従っていつもの部単位の宴会とはわけが違います。
ということで傘廻しプロジェクトのためのチームが結成されたのです。

演者 …… MIMO (設計)
口上師 …… Sさん (マーケティング)
パワーポイント …… Mさん (マーケティング)
渉外 …… Hさん (マーケティング)
プロデューサー …… Iさん (企画)

いつもはMIMO一人で出し物の順番や演出を決めていましたが、今回はチームのメンバー何人かが集まって打ち合わせして決定します。(会社の間人ばかりですから就業時間内だったりします。)

中心になったのは企画のIさん。そもそも企画という仕事は「どういう商品を作っていくのか、そしてできた商品をどう売っていくのか」を日夜考えている部署です。
そういう意味で今回も傘廻し(=既にできあがった物・・・いまだ仕様の追加は不可能です)をいかに魅せるかと言うことで本来の業務と密接な関係があったような気がします。そのせいかMIMOが今まで思いもつかなかったようなアイデアがぼんぼん出てきました。

今回のNAB出展商品を廻して観客の心を掴むとか、パワーポイントやカメラを使うといった派手な演出とか。こうして今までにない見事なルーティーンが完成したのです。

アメリカへ・・・

いちばんでっかいスーツケースをレンタルしてラスベガスへ。
もちろん中は傘廻し道具でいっぱいです。もう重いものなんのって。空港の手荷物検査で引っかかったらなんて言い訳しようかとときどきしましたがなんとかOK。

見ていると5人に1人くらいの無作為抽出で鞆は開けられているようです。傘廻し関係はこんなに巨大なくせに、着替えやビジネス用品は普通のボストンバック1個。これだけでも私が何をしにラスベガスに行ったかわかるというものです・・・

トラブル発生・・・

現地に着くとトラブルが発生していました。
なんと出発前に頼んでいたカメラとパワーポイントが準備されていないと言うのです。
こういう時こそ渉外のHさんの出番です。これらの機材は傘廻しの前に行く「社長のスピーチで使うかもしれない。」との一言で強引に入れてくれていました。

現地リハーサル・・・

MIMOの傘廻しはかなり大がかりな道具を必要とします。
そのため結局日本では個人練習しかできず、チームとしてのリハーサルは一度もできませんでした。
従って現地で練習&リハーサルしたのですが・・・。

傘廻し出張のMIMOとは違って、企画やマーケティングの人達は現地では大忙しです。NABには世界中から放送関係者が集まるわけですから、その機会をとらえてのミーティングや商談が山積みなのです。そういう忙しい間を縫いながら、練習につきあって貰いました。

そして最終的には当日ステージで本番さながらのリハーサル。音響さんや照明、パワーポイントの操作まで含めまわりの皆さん本当にお世話になりました。

パフォーマンス・・・

準備は大変でしたが、始まってしまえばあとはやるだけ。約10分間の演技です。ちなみに当日の演目は以下の通りでした。

0. 鞠(練習扱い)
1. 升
2. HDCAM-SR(=NAB出展商品)のドラム
3. XDCAM(=NAB出展商品)のディスク
4. QRIO(=S社のロボット試作品)の一輪車
5. ジャンボスフィア

リハーサルを入念にしておいたおかげでパーフェクト。失敗も無し。NAB出展商品を廻して盛り上げるという狙いも見事に当たりました。

本当によいできで、最後はスタンディングオーベーション。来ていた社長も大喜びでした。(できが良かったためか、2日後に追加公演までやることになりました。)



あと全体的にみてお客さんの「のり」が凄かったです。升を廻すころぐらいまでは緊張で手が震えているのがわかりましたが、お客さんの盛り上がりで緊張はどっかに飛んでいってしまいました。そうそう、アメリカ人は陽気で盛り上げ上手と聞いていましたが、今回そのことを肌で感じた気がします。

MIMOはもう10年以上傘廻しをやってきてお客さんの反応もだいたい予想がついています。観客が日本人の場合は面白いことをやった時、もしくは凄いことをやった時に拍手したり盛り上がりしますよね。MIMOが観客の時も、もちろんそうです。

しかしながらアメリカ人観客は盛り上がるのが許される場所を一生懸命探している感じです。そんなに面白くなくても凄くなくても、ここは盛り上がってもいいなと感じたところでは遠慮なく盛り上がっていました。そのパワーたるや、もの凄いものがあります。

きっと感覚的に知っているのでしょうね。そんなに面白くなくても盛り上げていくと演者が良い気分になっていつも以上に良い芸ができることを、そして結果的に凄い芸をみられて楽しい時間をすごすことができるということ。

日本人観客も是非見習いたい風習です。(これは芸人MIMOの感想ではなく、観客MIMOの感想ですよ。)

とは言ってもその実行は難しいものです。そんなに凄い(楽しい)芸じゃなくて、観客席も盛り上がっているわけじゃない。その中で一人盛り上がるのは結構恥ずかしいことです。

最後に

なんだかんだいってもラスベガスで傘廻しができた事実は本当です。最高の舞台上で最高の盛り上がり。いやー長年傘を廻してきて本当に良かった～。



イベント

去る6月19日・20日に名古屋で行われた日本ジャグリング協会主催によるフェスティバル JJF2004におけるチャンピオンシップで、森田智博さんが優勝されました。
国際サーカス村協会・サーカス学校の生徒でもある彼の演技を私も是非観たかった！！
さて沢入国際サーカス学校も設立後3年を経過し、今年には以下のような催しを計画しています。
(国際サーカス村は、群馬県勢多郡東村という所にあります)

サーカス学校公演

7月21日～7月25日(東村童謡ふるさと館にて)

ナジェイジダ先生の夏期講座

7月20日～7月26日(サーカス学校体育館にて)

サーカス展覧会

7月21日～(東村童謡ふるさと館にて)

大道芸を見よう

7月21日～7月26日

(国民宿舎サンレイク、草木ドライブイン等にて)

詳しくは以下へ。

E-mail : mura@circus-mura.net

Webサイト :

http://www.circus-mura.net/kairan/kai_menu.html



お知らせ

亀田雪人(かめだゆきと)さんの公演は一度だけですが拝見し、とある宴の席で一緒にした時にお話をさせていただき、公演で表現される人間の優しさというものが、亀田さんそのものであることが分かり、すっかりその人柄に魅せられました。

さて本題です。

若者に人気のグループ「ケツメイシ」の最新CD「涙」のジャケットのモデルが亀田さんなのです！

正直ケツメイシなんてグループ名は初耳で、なんじゃあ？と思っていたら、実はウチの娘(中三)が大ファンで、毎朝ケータイでこの「涙」を目覚まし代わりに鳴らして、歌詞もお気に入りらしくケータイに取り込んでいたことを知りビックリ。

で早速、金は出すからCD買って来いと娘に言えば、娘は当然歓喜！思わぬところで離れがちな娘とのコミュニケーション・・・(苦笑)

まあともかく、なかなかいい曲ですぞ。

その亀田さんとWEP JAPANさんとのインタビュー記事を次ページに掲載しますのでお楽しみ下さい。(亀田さんとWEP JAPANさんには了解済み)

・どん亀座Webサイト

<http://www.donkameza.com/>

・WEP JAPAN Webサイト

<http://www.wep-japan.com/wep4/>

・ケツメイシWebサイト

<http://www.ketsume.com/index.html>

編集後記

6月にタイと香港にそれぞれ一週間ずつ出張してきたのですが、前回のベルギー・スペイン出張時のようにサーカスに出会うことはありませんでした。残念！！

海外でサーカスを探す時にはとりあえずホテルのコンシェルジュに聞くのですが、欧州やアジアではCIRCUS(サーカス)という言葉はまず分かってもらえないのではないのでしょうか。CIRCO(チルコ)やCIRQUE(シルク)の方がまだ通りが良いようですが、それでも100%返ってくるのが「何それ？」といった類の回答です。

まあ考えてみれば日本のホテルで、外国人からサーカスのことを聞かれて即答できるスタッフがいても思えませんから無理からぬ事なのでしょう。

でもタイではサーカスアーティストのDioさんが、同時期にバンコクに滞在していることを知り、なんと現地でお会いすることができました。

Dioさんはタイでも様々な活動を長年されていてタイ語も達者で、美味しいレストランで食事したり、観光街を案内して下さり、サーカス見物に匹敵するくらい楽しいひとときを過ごすことができました。

ジャグパルは私という一個人が野次馬根性丸出しで、単なる趣味として発行していて、特定の企業、団体あるいはパフォーマー個人には一切関係しているものではありません。

ジャグパルはWeb上でも読めますので、紙での郵送が不必要な方はご連絡ください。

WebサイトJugPal: <<http://www.chansuke.net/jugpal/>>

編集発行人: 安部保範

住所: 横浜市栄区公田町424-9 (〒247-0014)

見世物広場: <http://www.chansuke.net>

E-mail: chansuke@chansuke.net



道化師の亀ちゃん

- 亀田雪人 -

【道化師の亀ちゃん - CLOWN'S KAMECHAN -】

～各地での良い出会いが僕をここまで導いてくれた～

「気がつけば37年。よく順調にこられたな、というのが実感ですね。いい出会いが中断なくあったからだと思います」と、亀田は淡々と話す。71年に日本マイム研究所でパントマイムを学ぶ、80年サーカスに入団、4年間在籍。この間に、一輪車、ジャグリング、綱渡りなどを習得、86年「どん亀座」設立し日本全国1,400以上の公演を行ってきた。

今回、亀田の寂しげな表情が表紙を飾ったケツメイシのマキシシングル『涙』もその出会いのひとつと話す。

肩書きはエンターティナーですか、それともパフォーマーですか？と聞いたところ、亀田はにっこり笑い「道化師です」と答えた。

「僕はどちらかと言うと、古くさい道化師。陶工に例えるなら、鑑賞用の芸術的な器というよりも、どこの食卓にも並んでいるような実用的な焼き物を作るような人だよ。どんなところででも常にお客とおなじ空気を吸いながら、どうしたらお客に楽しんでもらえる空気ができるかそればかり考えてるね。

最近は昔と違って家族揃って食事するってあたりまえの事が無くなってきている時代でしょ、そんな中、言葉で伝える事のできない温かい(存在感)空気を、お客さんに伝えたいね。

それって、家族同士だと自然に作れちゃうものなんだけど、演じることによって表現するとなると簡単そうできてなかなか難しい。37年かかってまだまだ自分自身が満足できるものにはなっていないよ。」

- ケツメイシのマキシシングル『涙』の撮影はどうでしたか？ -

「時間にして4時間ぐらいだったかな。実際にタマネギを切って涙をだしたりもしてね、撮影中も楽しくスタッフと盛り上がりながら時間を過ごしたよ。

スタッフのみんなが撮影の合間にジャグリングの練習にはまっちゃったり、とっても楽しい時間だった。撮影の間ずっとこのCDの曲が流れてたんだけど、若くない僕が聞いてもいい曲だなーって素直に思える曲でした。きっと、みんなも気に入ってくれるよ。」

- では最後に今後の活動などについて聞かせてください。 -

「もういい歳まできちゃったけど、僕の体が動かなくなる限り、これからも今のスタイルを追求していこうと思ってます。派手な事やすごい事はしないけど、見るだけでどこなく哀愁っていうか、なつかしさを感じる道化師が日本に一人ぐらいいてもいいでしょう。一年中旅しながらパフォーマンスを続けていきます。見かけたときは声をかけて応援してください。」

interview & text : WEP JAPAN YOKOHAMA OFFICE photo : YOTA



【亀田雪人(カメダユキト)】

1948.12.12 生
世界的に有名なマイミスト、マルソーに影響を受けこの世界へ。サーカス団員となり芸の幅を広げ独立。どん亀座を旗揚げし全国各地で公演を行う。
主な出演: テレビ番組「お母さんと一緒」NHK、舞台「野獣降臨(のけものきたりて)」パフォーマンス指導、どん亀座で日本全国1,400公演 など



涙

ケツメイシ

2004年4月21日発売

TFCC-89097

¥1,260(税込)

(株)トイズファクトリー